江戸時代の雅楽愛好家のネットワーク
－東儀文均の『楽所日記』嘉永六年の
記録より見えるもの－

南谷 美保

四天王寺国際仏教大学紀要

第40号

2005年9月

(抜刷)

江戸時代の雅楽愛好家のネットワーク

— 東儀文均の『樂所日記』嘉永六年の記録より見えるもの —

南谷美保

(平成17年3月31日 提出)

雅楽といえ、貴族および専門職としての楽人による演奏だけが行われ、それ以外の人々がこれを演奏する事はなかったという誤解は根強い。しかし、さまざまな史料が示しているように、江戸時代、特に江戸後半になると、雅楽演奏を嗜む人々が、武家、裕福な商人、地方在住者も含めた社関係者へと、かなりの範囲にまで拡大していたということが明らかである。本稿では、三方楽所楽人で、京都に在住した東儀文均が遺した日記である『樂所日記』をもとに、江戸在留の武家の間でどのように雅楽演奏が行われていたのかを考察し、こうした雅楽演奏者の拡大を支えた背景に、「雅楽ネットワーク」とでもいうべき雅楽愛好家の組織的な動きがあったことを、事例を挙げて論じるものとする。考察の対象とするのは、『樂所日記』嘉永六年の記事を中心とした東儀文均と江戸における雅楽愛好家との交流の記録である。特に、若年寄遠藤但馬守家中の山田元三郎をキーパーソンとして取り上げ、どのように「雅楽ネットワーク」が構築されていくのかを考察する。

キーワード…「雅楽ネットワーク」 東儀文均 『樂所日記』

素人社中 江戸

一 『樂所日記』の記事より伺える江戸時代の雅楽演奏者の拡がり

江戸時代における雅楽演奏が、専門職である三方楽所楽人¹⁾によるものだけにとどまらず、かなりの範囲にまでこれを嗜む人々が拡大していた事例を示す記録のひとつに、江戸時代、京都に在住した天王寺方の楽人、東儀文均(一八一—一八七三)が、天保十五年(一八四四)正月より、没する前年の明治五年(一八七二)まで書き記した日記である『樂所日記』(国会図書館蔵)がある。この『樂所日記』については、すでに、当時の地方在住および京都に在住する雅楽愛好家とプロの雅楽演奏家である三方楽所楽人との交流の様子に関する考察や、当時の雅楽曲のレパートリーについての調査結果報告などに際して、これを紹介している²⁾。これらにおいてすでに論じたことであるが、『樂所日記』全巻の記載事項を見る限りでは、天保十五年以降の京都では、雅楽の演奏は、貴族や専門職である楽人のみが行うものでなく、すでに雅楽演奏を趣味として嗜んでいた人々、もちろん、それは、庶民とはいいたい裕福な商人および武家であるが、こうした人々によっても行われていたことが明らかである³⁾。さらに、儀式進行上の必要性からか、多くの僧侶や神官が雅楽を嗜んだ様子も伺われる⁴⁾。加えて、今回は、『樂所日

記』第十の嘉永六年の巻にある東儀文均の江戸下向に関する記事を取り上げ、この時期の江戸における武家の間での雅楽演奏の実態およびこうした状況を可能にした雅楽愛好家のネットワークの存在について考察してみようと思う。

繰り返しになるが、本稿において考察の対象とした嘉永六年の東儀文均の江戸下向の前提条件として、すでにこの時代において、かなり多くの非職業的雅楽演奏者、つまり、本職として雅楽演奏に従事しているわけではない雅楽演奏家の存在があったということに言及しておきたい。江戸時代においては、雅楽が広く一般庶民に親しまれていたわけではなかったとしても、現代に同じく、これを学ぼうと希望する者には、学ぶ場が提供されうる状況にはなっていたのである。次に、中には女性も含む非職業的雅楽演奏者あるいは愛好家が、楽人という雅楽専門職に入門し、稽古を受けるということからは、当然のことながら、謝礼の授受という行為が発生したということも確認しておきたい。入門から初級の手ほどき、そして上級者への相伝に至るまでの教習システムが、その都度支払われる謝礼の基本的金額ともども定まっていたらしいことが、『樂所日記』の記事からも伺われるのである。その結果、江戸時代の三方楽所楽人は、現在のプロの音楽家に同じく、職務として、あるいは職業としての雅楽演奏を行いつつ、後進を指導教育し、かつ、雅楽専門職以外の人々へのお稽古を行う先生という忙しい生活を送っていたのであり、同時に、三方楽所楽人の間では、家元組織に準じた、地方在住者も含む門弟への雅楽教授システムが構築されていたということが明らかなのである。

二 三方楽所楽人と江戸との関係

こうした状況の中で、三方楽所楽人の地方へのいわゆる「出張稽古」が行われることは珍しい現象ではなかったようである。もともと、こうした地方への雅楽指導のための出張記録は多くは残されてはおらず、東儀文均が『樂所日記』において、複数回にわたる地方への出張稽古に出かけた記録を残していることは、きわめて貴重なものである。もともと、これらの出張稽古は、おおむね決まった地域の定まった関係者の元へ出かけるというものであり、東儀文均の出張先も、美濃、名古屋、三河という範囲を中心とするものであった。江戸時代の三方楽所楽人に関する資料はごく限られた範囲のものしか現存していないために断定はできないが、今回の考察の対象とした三方楽所楽人の江戸への出張稽古という事例は、これらの地域におけるほど頻繁に行われたものではなかったと思われる。

とはいっても、三方楽所に対しては、江戸幕府より楽所領知行が与えられていた。ので、恒例の勅使の「歳首の賀」のための登城に随って、三方楽所総代も江戸城に下向することが恒例であった。少し時代が下るが、この『樂所日記』第十九の文久二年の巻に、記録者である東儀文均自身が、関東年頭総代として江戸下向を予定していた記事がある。この年は、さまざまな事情があり、年頭の挨拶のための下向期間を、九月二十三日から十二月三日までと予定していたこと、その目的としては、「年頭御礼」と「奏楽御用」とが挙げられた口上覚の控えが残されている¹⁰。

ここで、「奏楽御用」とあるのは、『徳川実紀』、『統徳川実紀』などにも記載される「管絃」のことで、この三方楽所楽人の下向に合わせて年一回行われた「管中管絃」に、三方楽所楽所総代の楽人が参加したことは、『樂所日記』第十三の安政三年八月十日条に、「関

東年頭惣代且亦管中奏楽御用」と記されていることから、明らかである。さらに、滞在期間中、紅葉山楽人の楽儀指導にあたった可能性もある。この紅葉山楽人というのは、寛永十八年から同十九年にかけて江戸城内紅葉山における祭祀や法要の奏楽を担当するために、三方楽所より四名の楽人が江戸に下向して形成された組織であり、この紅葉山楽人は、その後次第に数を増やし、『楽所日記』嘉永三年三月十七日の記事では、当時「南都十六家、天王寺二十一家、京都十八家、紅葉山十家」があったと記されている¹¹⁾。

さらに、江戸幕府は日光での法要や神事のために、あるいは江戸での法要のために、三方楽所の楽人を招聘するというを行った。しかし、江戸時代後半になると、こうした祭祀や法要のために三方楽所楽人を招聘することも中断し、『楽所日記』によれば、元治二年（慶応元年）四月には、徳川家康の二百五十回忌が、五十年の空白期間を経て、三方楽所楽人の下向を伴って執行されることとなった¹²⁾。とはいうものの、三方楽人が日光の楽人を指導するという制度は存続していたらしく、雅楽教習のために日光まで出向く楽人はいた¹³⁾。

こうした状況を考えると、三方楽所楽人にとっては、紅葉山には、親戚筋の楽人がいたわけであり、毎年、楽所総代は江戸へ下向していたのであるし、かつては、しばしば江戸まで出張しての奏楽も行われたわけであるから、職務として下向した楽人仲間や年長者を通じて江戸という土地に関する情報は伝わっていたであろう。したがって、たとえ京都在住の楽人であっても、江戸は全く未知の場所というわけではなかったと思われる¹⁴⁾。しかし、東儀文均にとっては、わざわざ江戸まで雅楽の教授に出向くということは、その生涯で、この嘉永六年の一度きりのことであったし、その他の楽人にとっても、職務以外の理由で江戸に出向くという機会は、さほど多くはな

かったのではないかと思われる¹⁵⁾。

三 嘉永六年の東儀文均の江戸下向の目的

さて、東儀文均は、どのような雅楽指導を行うべく、江戸に下向したのであるか。『楽所日記』第十の嘉永六年一月二十二日の条には、以下の願書の写が残されている。

奉願口上覚

比度関東東儀阿波守方江無扨用向有之候ニ付従来ル二月

八日四月廿八日迄日数八十日之間御暇奉願下向仕度候ニ付比段

宜御沙汰奉願候 以上

丑正月

東儀近江守

四辻中納言様御内

山路右兵衛大尉殿

渡邊掃部殿

同二十八日条によると、文均は四辻殿よりこの願い出が聞き届けられたとの通達を受けて、三方楽所の関係者にもこの期間不在の旨の断りを入れていた。

この願書の文面を見る限りでは、東儀文均はその縁者で、紅葉山楽人の東儀阿波守方を訪問するという私用を表向きの理由として届け出ている。しかし、以後の『楽所日記』第十の記録を見れば明らかのように、江戸へ下向する主たる目的は、江州三上城主遠藤但馬守の近習を始めとする武家関係者への雅楽指導である。つまり、東儀文均は、江戸下向の実際の目的を、統括者である楽奉行四辻家に

偽って申告しているのである。

しかし、このような記事は、この嘉永六年の例が初見ではない。東儀文均は、嘉永元年にも、美濃から名古屋方面にかけて出張稽古に出かけているが、その際にも不在の理由を親戚である三河西尾の御劔八幡宮神主新家筑後守を訪問するためとして、四辻家に届けている¹⁶。当時の三方楽所楽人は、禁裏御用の楽人として、みだりに他行することを禁じられており、留守をする際には、必ず届け出が必要とされていた。そして、その届け出にあたって、この例のように、地方へと雅楽の指導に向くという理由を表に出せなかった理由については推測の域をでないが、あえて触れるならば、一つには楽人が楽奉行四辻家の支配下にあつたために、正式な派遣依頼を行うには手続きが煩雑であつたこと、および、正式なルートを通しての依頼になれば、三方楽所全体としてその依頼を引き受けたことになり、三方楽所としての協議の上で誰を派遣するのかを決定するというさまざまな手続きが必要となる案件へと発展しかねないということがあつたからであろうと思われる¹⁷。もちろん、その結果として、必ずしも依頼者が希望した楽人が派遣されるとは限らないという事態も起こりかねない。したがって、東儀文均も私的な依頼を受けた結果として、このように下向理由を偽つての地方への出張稽古を行つていたのである。

ところが、虚偽の申告で通してきた従前までの出張稽古は、三河地域までの移動であつたので、通行手形などの身分証明は必要ではなかつたのに対し、今回のように江戸までの下向となるとそうはいかない。かつ、楽奉行には虚偽の申告を行い、また職務上の下向でもないとなると、禁裏付三方楽所楽人という身分での手形は発行されないであろう。そうなる、江戸までの関所を通過するために必要となる通行手形をどのようにして入手したのかということが問題

になる。

『楽所日記』第十の記事には、江戸より京都に戻る際の手形の控しか残されていないが、これを見ると、「白川殿家士 益田栄蔵」という名のもとで、「当家用向有之尾州名古屋迄罷越候其御関所無相違御通可被下候」として「白川殿関東執役古川将作」が発行したという手形を持つて箱根の関所を通過したようである¹⁸。逆にいえば、身分と氏名を偽つた手形を「白川殿関東執役古川将作」なる人物に発行させてまで、江戸に文均を下向させることを必要とした事情が、江戸の側にあつたということになる。ここで、関与が疑われるのが、遠藤但馬守の周辺に存在した人々である。というのは、後述のように、『楽所日記』第十の記事からは、文均が、江戸で頻繁に接触したのは、定府大名江州三上藩主で当時若年寄であつた遠藤但馬守の家来衆であり、その中でも、殿様ご近習の山田兄弟への雅楽の指導が、この江戸下向の主たる目的であつたことが明らかであるからである。

どのような経緯で、遠藤家より東儀文均に雅楽指導の依頼があつたのかについては、『楽所日記』には一切記されていない。この点については後に再び触れることとして、ここでは、『楽所日記』に残された手がかりのみを挙げる。それは、江戸まで東儀文均に同道した古川氏の存在と、嘉永六年一月十五日条に、「紅葉山岡江州」より手紙が来たという記事、および同年一月二十三日条に「過日紅葉山岡江州より予下向之儀申来付」とする記事である。岡江州、すなわち岡近江守とは、おそらく岡昌輪（後に昌信に改名、一八〇八年生）のことであろう。この昌輪は、紅葉山楽人の東儀勝成の次男であり、同じく紅葉山楽人の岡家に養子に入った人物である。東儀家も岡家もいずれも天王寺方である。その岡近江守が、天王寺方の東儀文均¹⁹に江戸下向を依頼したと記されるのであるが、これは、

すでに以前から相談があり、概ね決定していた案件であったであろう。この年一月の時点での手紙とは、おそらく、古川氏という同行者とともに下向するように、とする最終確認の手紙であったのではと思われる。

一方の古川氏については、『樂所日記』の記録をさかのぼっていくと、嘉永三年一月二十二日の条に「昌好門人関東古川素平上京入来致合奏事」という記事を見出すことができる。つまり、同じ天王寺楽所楽人でも、大坂に居住した在天楽人岡昌好（同じく在天の楽林家より養子に入る）の弟子であった古川素平が京都の東儀文均を訪ねてきて合奏をしたというのであるが、その後同年三月八日の条に、「古川今日発足付暇乞参」とあるまでの期間、四回にわたり東儀文均の指導を受けている。

この古川素平と、嘉永六年一月八日に上京し、文均と江戸への下向を共にした古川氏は、同二月九日の条に、「今般古川白河殿御用ニ而下向」とあることから、東儀文均が京都に戻るに際して発行された手形にあった「白川殿関東執役 古川将作」のことであろうと判断される。おそらく、江戸下向の際に必要な書類も、『樂所日記』には、「先触人足帳面等頼置」とあり、この古川氏が手配したのであろう²⁰。手形などの手配にとどまらず、『樂所日記』には、「万事古川へ願置候事」とあり、出立に先立ち、江戸滞在中に必要な着物などを、江戸まで送付する手続きをさせるほか、道中の経費などもすべて古川氏に任せていたものらしく、日記には旅行中に関しては金銭的な記録の記載が一切残されていない。

四 東儀文均の江戸での行動

嘉永六年二月九日に京都を出立した東儀文均は、途中、美濃、名

古屋の弟子たちを訪問しながら、同月二十四日に江戸に到着している²¹。まず、「浅草新堀白川殿役所」へ古川氏と共に寄り、向島柳浦の古川氏自宅へ到着すると、岡近江守がそこへ尋ねてくる。「岡江州入来、始而面会」とあるが、翌日より、滞在先を岡江州の自宅とすることが決まる。しかし、翌日二十五日には、「久恭子、久々ニ而面会」とあり、事情があつて京都を離れていた²²もと三方楽所楽人の多久恭²³の居宅に滞在することに変更となる。

同月二十五日には、今回の江戸下向の招聘者であつたと思われる若年寄江州三上藩主遠藤但馬守の屋敷を訪問し、雅楽の合奏を行っているが、そこへは、岡江州こと岡昌輪とこの久恭も同道する。ここで、文均のもとへ手紙を寄越した岡昌輪と遠藤家との繋がりが明らかになる。以後の記録によっても、この岡昌輪が、江戸において武家たちの雅楽指導の中心的役割を果たしていたことが示される。また、京都では楽人としての勤めが果たせない事情があつた久恭も、遠藤家には雅楽指導のために出入りしていたようである。以後の文均の江戸での行動は「表一」²⁴としてまとめるが、この「表一」により、東儀文均の江戸下向の主な目的が、遠藤但馬守家中の加藤正三郎および側近習の山田元三郎および山田貞（この人物は、『樂所日記』の初出では貞、ワタリと振り仮名され、後には亘あるいは互とも表記される）兄弟への指導であり、これが江戸滞在中の主な業務であつたことがわかる。

「表一」によれば、前述のように、岡昌輪を中心とした紅葉山楽人が、かなりの多くの武家の雅楽の指導にあたつていたことが明らかになる。そして、この年の年頭総代として下向した窪近直も、田安御殿での楽会のほか、武家の自宅で催された楽会に参加している。また、東儀文均は滞在中のほとんど毎日、遠藤但馬守家中の加藤氏および山田兄弟に稽古を行うほかに、紅葉山楽人とともに、武

家の楽会に参加している。しかし、この「表一」に示されるように、ほぼ連日、武家において雅楽の合奏が行われているのは、たまたま京都から文均が下向したために集中的に指導を受けようとした結果なのか、あるいは恒常的にこうした状態であったのかは、嘉永年間の状況を比較できる記録が見当たらないために判断できない。

同じく三方楽所楽人が残した史料として、比較の対象となるのは、少々時代が隔たってしまうが、『四天王寺楽人林家楽書類』（京都大学図書館蔵）に含まれる『天王寺々僧與争論之留』第四冊から第六冊にある宝暦十年から十一年（一七六〇—一七一）にかけての天王寺方楽人の江戸在留記録である²⁴。嘉永六年の文均の江戸在留記録からは九十年ほど時代を遡った記録となる。

同書によれば、宝暦八年よりの天王寺楽所楽人と四天王寺との係争に関する判断を仰ぐべく寺社奉行へ出頭するために、天王寺方楽人、林廣基、東儀兼貞、岡昌家、岡昌晴の四名が宝暦十年十一月に江戸に到着した。この四名は、宝暦十一年六月には江戸を離れるのであるが、この間、宝暦十一年二月以降同年六月までの江戸滞在中の記録が「天王寺争論ニ付関東下向諸事控帳」（「天王寺々僧與争論之留 第四冊」）として残されている。同書には、宝暦十一年二月十五日以降の記録が日次記事として残され、これによると、天王寺方楽人は、三月十日に稲垣因幡守殿のもとを始めて訪れ、同月二十日には、稲垣殿とその家中宅原源左衛門に舞楽および楽曲を指導している。稲垣殿と宅原の両名は、舞に関して、すでに基礎的な稽古を紅葉山楽人が行っていたのか、「相傳」とする記事も見られる²⁵。さらに、稲垣殿御近衆永見清六も稽古に加わり、宅原とこの永見の二名は、天王寺楽人が江戸を去るまで、ほぼ毎日のように稽古を受けていたことが記される。この他にも、松平安芸守殿家中森司馬、松平伊豆守殿緒家内福島傳蔵、大岡兵庫頭殿御家中山縣洞斎の三名

が、この期間に集中的に舞の稽古を受けていることも記される²⁶。このように、宝暦年間の江戸でも、武家の間で雅楽が嗜まれ、その指導に紅葉山楽人が関わっていたこと、かつ、特に舞楽に関しては、江戸へ下向した天王寺楽人のもとで集中的にこれを学ぼうとした人々がいたことが伺われる。

とはいっても、嘉永六年の東儀文均の江戸下向の例に示されるように、わざわざ京都から「師匠」を招いてまでも雅楽を学びたいという状況がどのような背景のもとに生じてきたのかは、全く不明である。また、嘉永六年の記録で特に注目したいのは、東儀文均の帰京に際して、遠藤殿若殿式部少輔殿が「筆築道御入門」となり、その「御手次」として、つまり、身分の高い人物などが、直接雅楽演奏の指導を受けることが出来ない場合に、その代わりに稽古をうけて演奏技術を伝える存在として、山田元三郎が東儀文均に隨身して京都へ上り、しばらく京都で稽古を受けることが決まったとする記事である。つまり、遠藤但馬守家では、主君以下、その若君までが、楽道にかなり執心していた様子が伺えるのである。

ここで、この一覧表に示される遠藤但馬守の周辺について、少し述べることにする。雅楽に深く関わった武家としては、この「表一」にある田安家が筆頭となろう。田安宗武を祖とする田安德川家は、多くの雅楽資料を所蔵し、雅楽を研究する家として知られていた²⁷。当然のこととして、この表にあるように、装束や面も所持しており、三方楽所総代下向に伴う恒例の「管中管絃」の前には、田安御殿で管絃および舞楽の演奏と云うことが、これも毎年行われていたのかもしれない。こうした影響を受けて、紀州徳川家の例をはじめとして、松平定信らのように雅楽を学ぶ武家が存在したことが、断片的な資料からすでに知られている。

では、遠藤但馬守と雅楽との接点はどこにあったのであろうか。

〔表一〕

『楽所日記』巻十の記載事項による東儀文均の江戸滞在中の行動

2月24日	江戸到着
25日	向島古川宅より岡江州宅へ移動、加藤正三郎子、遠藤殿藩中山田元三郎子に面会。遠藤但馬守殿へ参上。昌輪、久恭と共に、夕方まで数曲合奏御相手、酒肴飯、金三百疋頂戴。この夜より多久恭宅へ移動する(1)
26日	紅葉山楽人東儀元鳳宅、東儀常城宅へ挨拶回り。午後岡江州宅にて稽古
27日	遠藤側近習山田元三郎、頁兄弟稽古に来る。松浦家来丹波楽蔵が金百疋持参し稽古を依頼する。昼後、昌輪同道して四ツ谷文郁丈方訪問。市ヶ谷尾張屋敷御長屋間宮氏宅(2)を、岡江州と訪問
28日	昼前より、昌輪、久恭とともに、鍋町御楽器師菊岡内匠宅楽会に参加。14人ばかり出席、酒飯、金二百疋。留守中、古川が、京都より送った荷物を届ける。紅葉山楽人元鳳、季達らが訪問
29日	早朝より、久恭と猿若一丁目芝居を終日見物する
3月1日	早朝上野の桜見物。近直子(3)が、総代下向中なので和泉徳に見舞う。朝、山田兄弟稽古に来る。加藤氏も稽古に来て金二百疋を持参する。昼後遠藤殿楽会に昌輪、久恭、文均参上、夜帰宅
2日	午後より、本庄二万石三州拳母領主隠居内藤撰津守殿へ楽会に昌輪、久恭、文均参上。夕飯、酒肴、金二百疋。夜帰宅
3日	加藤氏、山田兄弟氏来る
4日	朝加藤氏、山田氏兄弟来る。昼後、敦賀城主一万石酒井右京亮殿の楽会に昌輪、久恭、文均、久視父子参上。酒肴飯、金三百疋を受け取り亥刻帰宅
5日	朝、山田氏兄弟、丹波来る、昼後、遠藤殿へ参上。平調七曲を管絃で演奏、その後、舞楽(4)。子刻比退散
6日	早朝より久恭と両国廻向院境内大相撲見物に出かけ、夕方帰宅
7日	山田氏兄弟来る
8日	朝山田氏兄弟来る。昼後、桑山六左衛門殿方の楽会。太食調七曲合奏、近直、昌輪、久恭、文均、加藤氏、日光宮権大夫音羽、金二百疋を受け取る。夜帰宅
9日	田安御館立入御免となり巳刻参上。中納言様御対面、楽会(5)。酒肴、銀一枚、羅肩衣地頂戴
10日	加藤氏、山田氏兄弟、丹波氏来る
11日	山田氏兄弟来る。昼後、元鳳訪問し、岡江州へ稽古に行く。京都へ書面差し出す
12日	山田氏兄弟来る。今日、當中奏楽之由承る(6)
13日	朝山田氏兄弟来る。昼後、本庄内藤殿楽会に昌輪、文均、久恭参上、御飯頂戴
14日	朝丹波氏来る。昼前より遠藤殿楽会に昌輪、久恭、文均参る。夜、御飯頂戴
15日	朝菊岡に立ち寄る。息子松之助入門、金百疋束脩。昌輪、久恭、文均で愛宕山、増上寺に参詣。三州拳母領主三田内藤山城守殿へ参上。楽会七曲合奏、昌輪、久恭、文均参加、酒肴、金二百疋を受け取る。夜帰宅
16日	山田兄弟、丹波来る
17日	山田氏兄弟来る。昼後、桑山楽会に昌輪、久恭、文均参上
18日	山田兄弟来る。昼後、岡江州方へ稽古に参る

19日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。午後、遠藤殿へ稽古に文均が参上、夜二入帰宅
20日	山田兄弟、昼前より常城丈と共に番町御旗本進藤三左衛門方へ楽会に参る。常城、弘城、景安、久臣、季直、文均出席、数曲合奏、酒肴飯、金二百疋を受け取る。夜帰宅
21日	山田兄弟、丹波来る。昼後、古川へ参る
22日	山田兄弟、神田承(昌)平橋内御旗本天野弥五衛門へ楽会に参る。昌輪、常城、弘城、文均出席、金二百疋を受け取る。夕方帰宅
23日	山田兄弟、丹波来る。昼後、岡江州へ稽古に参る
24日	山田兄弟、菊岡来る
25日	菊岡方へ山田が来る。昼前より遠藤殿へ参上し、数曲合奏、昌輪、久恭、文均出席、夕飯頂戴
26日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。申刻比より御祐筆黒澤正助宅楽会で数曲合奏、元鳳、昌輪、久恭、文均、山田、丹波出席、酒肴飯、金三百疋
27日	昼前より三田内藤殿楽会に参上。昌輪、久恭、文均、数曲合奏、夕飯頂戴、夜二入帰宅
28日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、田安藩中岡田多膳方の楽会に、昌輪、久恭、文均出席、数曲合奏、酒肴飯、金百疋。夜帰宅
29日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、菊岡楽会に昌輪、文均参加、夕方帰宅
30日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、桑山楽会に参加、昌輪、久臣、文均、加藤出席、数曲合奏、夕飯、夜帰宅
4月1日	山田兄弟、菊岡来る。遠藤殿より八丈島裕頂戴、即刻着用して楽会に参上、夕飯頂戴
2日	山田、丹波、菊岡来る。昼後、久恭と共に両国へ嘶を聴きに行く
3日	山田兄弟、丹波来る。昼後、菊岡方で昌輪、久恭、文均参加、楽会
4日	丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿で稽古、常城、文均参上、御飯頂戴
5日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、御旗本松浦金三郎殿の楽会に元鳳、文均、久視父子、久恭参加、数曲合奏、酒肴飯接待、金二百疋を受け取り夜帰宅
6日	遠藤殿の紹介にて、保昌大夫宅之月次稽古能会日を、山田氏の案内で終日見物する。能七番、狂言六番、御弁当頂戴、夕方帰宅
7日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、岡江州へ稽古に参る
8日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。午後、昌輪、久恭とともに、桑山楽会に参る。夕飯接待、夜帰宅。京都へ書面を出し、「河州方御暇三十日日延之儀頼遣候事」
9日	山田、丹波、菊岡来る。昼後、黒澤楽会に参る。元鳳、昌輪、文均、丹波出席、酒飯接待、銀一枚、晒一反を受け取り、夜帰宅
10日	多時久、昨日より日光表へ下向につき、上松求馬(7)へ手紙言付ける。昼前より三田内藤殿へ楽会に参上。昌輪、久恭、文均、数曲合奏、夕飯出、夕方帰宅
11日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、昌輪と天野へ稽古に参る。金百疋と夕飯。薄暮より丹波宅楽会に参り、数曲合奏。元鳳、昌輪、久臣、文均、松浦父子出席、金百疋と酒飯
12日	山田、丹波、菊岡来る。加藤が来て、肴料金三百疋持参、岡江州へ稽古参る
13日	山田、菊岡来る
14日	山田、丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿楽会に参上、夜まで、御飯頂戴

江戸時代の雅楽愛好家のネットワーク

15日	山田、丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿へ楽会に参上、御膳頂戴帰宅
16日	山田、丹波、菊岡来る
17日	山田、菊岡来る、加藤来る。昼後、佐竹家中田代楽会に参る。数曲合奏、常城、文均、加藤、古川出席する。酒肴飯、金百疋。夜帰宅
18日	山田、菊岡、丹波来る。昼後、遠藤殿へ楽会に参上、夕飯頂戴
19日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、桑山楽会に昌輪、久臣、文均参加、夕飯出る、夜帰宅
20日	山田、丹波来る
21日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿へ高須御隠居攝津守殿御出の楽会があり昌輪、文均、久恭参上、酒肴飯頂戴
22日	山田、丹波来る。昼後、本庄内藤殿楽会に昌輪、文均参上、数曲合奏、酒肴飯頂戴、夜帰宅
23日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿へ参上し数曲合奏、夕飯頂戴帰宅
24日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、岡江州へ稽古に参る、三田内藤殿より金二百疋届く
25日	山田兄弟、菊岡来る。昼後遠藤殿へ参上し数曲合奏、夕飯頂戴帰宅
26日	山田、菊岡来る、昼後、築地旗本粕（粕）葉左衛門殿方へ楽会に参る、元鳳、昌輪、文均、久恭出席、酒肴飯金二百疋、他に金二百疋聴聞中より岡、辻、文均へ出る、分配する（9）、夜帰宅
27日	高須御隠居屋敷へ、昌輪、文均、久恭、山田元三郎参上。中飯頂戴、夕方数曲合奏、酒肴飯、銀一枚頂戴
28日	山田、丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿へ昌輪、文均、久対参上。数曲合奏、夕飯頂戴
29日	築地諏訪因幡守殿の楽会に昌輪、文均、久恭参上。一万石酒井大学殿御客とのこと、数曲合奏、酒肴飯、銀壹枚頂戴、夕方退散。菊岡楽会に立寄り、金二百疋、郡山家中野呂氏より金五十疋、夜帰宅
30日	丹波、菊岡来る。昼後、桑山楽会に出席、数曲合奏。昌輪、時久、久臣、文均、古川、山田出席、夕飯頂戴、夜帰宅
5月1日	山田兄弟、丹波、菊岡来る。昼後、遠藤殿へ参上し数曲合奏、夜御飯頂戴、羅肩衣袴頂戴
2日	山田兄弟、丹波来る。昼後、天野楽会に昌輪、文均参上。夕飯、金百疋。
3日	山田兄弟、菊岡来る。午後、遠藤殿楽会に昌輪、文均参上。夕飯頂戴帰宅
4日	山田、丹波来る。昼後、羽倉内記殿方の楽会に参る。元鳳、昌輪、文均、桑山、加藤、丹波出席。酒肴飯、金百五十疋、夕方帰宅
5日	山田、菊岡、丹波来る。昼後遠藤殿へ参上、数曲合奏、昌輪、時久、文均、夕飯頂戴
6日	朝古川へ暇乞に参る。道中先触、荷物、飛脚などのことを依頼する。常城丈方、文郁丈方へも暇乞い、文郁より兼陳書筆築譜貰い請ける
7日	岡江州へ参る。昼後、遠藤殿へ昌輪、文均参上、数曲合奏。遠藤殿若殿式部少輔殿筆築道御入門式、銀三枚下さる。御手次のために、山田元三郎が京都まで隨身する旨が定まった。酒肴頂戴、江戸滞在中の稽古謝儀として銀五枚、金にして三両三歩を受け取る。
8日	元鳳、常城、昌輪、季達、勝長ら餞別の品。丹波より金五百疋、山田兄弟より金五百疋、丹波より筆築料千疋、尾州細井より金百疋、桑山より金五百疋、加藤より金三百疋、などの記載あり
9日	卯半刻辻宅発足、山田宅へ誘参、同道出立

(1) : 久恭宅とあり、最終日に「辻宅発足」とあることから、久恭は、江戸では辻姓を名乗る叔父方の多家の関係者として行動していたものと思われる。(2) : 間宮家は、名古屋でも文均に雅楽の指導を受けている。(3) : 南都方楽人窪近直。以後の記録を見ると、滞在中、紅葉山楽人が出入りしていた武家の屋敷での楽会に参加するなどしているの、従前より、楽所総代として下向した三方楽所楽人と江戸の武家との間では交流があったものと思われる。(4) : この日の記録には、総代下向の近直、昌輪、常城、時久、文均、久泰、岡罵雅楽らが参加し、近直が舞楽「陵王」を、文均が舞楽「納曾利」を舞っている。この兩名に対し、御菓子一折と縮緬一反がそれぞれ与えられた。(5) : この日の楽目録は、一越調調子、賀殿破、急、胡飲酒(残楽三反)、陵王、郢曲松根(二反)、武徳楽とあり、管絃は久泰も含む紅葉山楽人と文均で演奏し、その後ご所望により、ということで、延喜楽と納曾利を文均が舞った。楽は狩衣を田安家より借用、舞楽に際しても、「装束面拝借」とある。(6) : 恒例の三方楽所総代下向に伴う「管絃」である。(7) : 日光楽役(8) : 聴聞衆よりの二百疋の祝儀が「岡、辻、予」に出されたとある。紅葉山楽人には辻家は存在しないので、これは、辻姓を名乗った多家に対して出されたものである。(1)でも触れたように、多久恭が辻姓を名乗っていたらしいので、これは、昌輪、久恭、文均に対する祝儀であろう。

この但馬守とは、遠藤備前守胤富の婿養子であった胤統(一七九三—一八七〇)のことである。胤統(後に胤緒)は、文化八年、家督を相続し三上藩五代藩主となり、田安門守衛、祭礼奉行を経て大坂城青屋口加番、大坂城玉造口定番を経て、天保十二年に若年寄に就任している。大坂城勤番の武家は、しばしば四天王寺の聖霊会を拝観していたことが当時の四天王寺の資料に残されている。したがって、遠藤但馬守と天王寺方楽人との接点は、胤統の大坂城勤務時代にあったと推測できる²⁸。また、大坂勤務に先立つ祭礼奉行の職は、日光での祭礼を担当するものであるから、この職務中に雅楽演奏に接したことも充分に考えられる。若年寄に就任した後は、毎年勅使登城に随行する楽人の下向に合わせて行われる「営中管絃」を聴聞する機会にも恵まれる。このように、胤統はその職務を通じて、雅楽に接する機会が多くあった。ここに、胤統と雅楽との接点のひとつがある。

さらに、遠藤殿若殿式部少輔殿とある人物にも注目したい。この若殿は、遠藤胤昌のことであるが、この人は、胤統の婿養子として遠藤家に入ったが、胤統が幕府要職にあつたため藩主を譲られないままに、すでに嘉永六年には三十六歳であった。この遠藤胤昌の実父は美濃高須藩主松平義和で、実父義和も、水戸徳川家より養子に入った人物である。そして「表一」中に高須御隠居攝津守殿とあるのは、この義和の次男で、高須藩主を継ぎ、嘉永三年に隠居した松平義建である。さて、高須藩といえは、「表一三」にも示したように、文均が豪商吉田家を中心にしてしばしば出張稽古に出かけた土地である²⁹。そして、遠藤家は、この高須藩より養子を迎え、その兄である元高須藩主義建の接待のために楽会を開催している。義建が雅楽を嗜む人でなければ、わざわざ接待のために楽会を開催することもないであろう。高須藩は、雅楽を嗜んだ藩主の影響のもと、雅

楽が熱心に行われた土地であったのであろうし、この松平義建を通じて、東儀文均と遠藤但馬守家との関係ができた可能性もある。

また、松平義建は、尾張藩の大道寺家と交流があったとされる。大道寺家といえは、東儀文均が、名古屋で雅楽の指導をしていた浄信寺と関係があり³⁰、大道寺家当主も、文均からも雅楽指導を受けていた。このような人間関係から、尾張名古屋の浄信寺―尾張藩大道寺家―高須藩主―三上藩主の繋がりによる「雅楽ネットワーク」が存在し、そのネットワークに関わっていた東儀文均が江戸へ下向することになった経緯がほんやりとながらも見えてくる。

加えて、この〔表一〕中では三州拳母領主内藤家にも注目したい。三州拳母領主隠居内藤撰津守殿は、内藤政優、もとは、近江彦根藩主井伊直中の八男である。そして、拳母領主の内藤山城守、内藤政文は彦根藩分家井伊中頭の子であるが、先の領主の実父井伊直中の十四男で彦根藩主であった井伊直弼の「養い方」となって、拳母藩に入っている。彦根藩では、この直中と直弼の間の嘉永三年まで藩主を勤めた十二代藩主直亮（直中三男）が、雅楽を愛好し、自ら演奏を行い、家臣にも雅楽を学ばせ、また多くの楽器を収集したことで知られている³¹。この井伊直亮と兄弟関係にあった内藤政優、縁戚関係にあった内藤政文が、その環境から、やはり雅楽を愛好したのであろうことに不思議はない。

これ以外の旗本衆などについては、いまだ調査が及んでいないが、東儀文均が、江戸滞在中に雅楽を指導した高位の武家は、いずれも背景に縁戚関係も絡んだ「雅楽ネットワーク」で繋がる武家であったことが推測される。江戸時代において、雅楽演奏が武家の間に広がっていく要因のひとつとして、こうした「雅楽ネットワーク」の存在があったことに注目しておきたい。³²

五 京都へ戻った東儀文均の行動

嘉永六年五月二十六日に京都へ戻った東儀文均は、同月二十八日付で四辻家に帰宅届を提出している。その書面を以下に翻刻する。

口上覚

此度関東東儀阿波守方江無抛用向有之候ニ付去ル二月八日より四月廿八日迄日数八十日之間御暇奉願下向仕居候処於彼地所勞ニ罷在候故保養仕上京仕度候ニ付乍恐四月廿九日より五月廿八日迄日数三十日之間御暇日延之儀奉願具候処所勞全快昨日帰宅候ニ付此段御届申上候間宜御沙汰奉願候 以上

五月廿八日

東儀近江守

四辻中納言様御内

山路右兵衛大尉殿

渡邊掃部殿

この口上書控えでは、江戸下向の目的を再び偽って申告した上に、江戸で病気になるために帰京が遅れたと届け出ていることもわかる。『楽所日記』同月翌日の二十九日条を見ると、四月二十二日付で、東儀河内守が本人に代わり、東儀文均が江戸にて病気になるので保養の上で帰京したいので、休暇を三十日延長したいという旨の願書を出した文面の写が残されている。〔表一〕にも示したように、東儀文均が四月八日付で、江戸より東儀河内守宛にこの旨を依頼する書状を出したとする記録が『楽所日記』にある。

さらに、東儀文均は、四月二十八日に帰宅届けを出す際に、あわせて江戸の加藤正三郎の「箏御門入之儀申込候処御許容」とし、ま

た、「其外江戸表組合、尾州表組合、御門入申込候処追而御沙汰可有之との事」とあったことも記している。箏、琵琶、和琴などは、これを伝承する貴族が独占的に教授権を握っていたので、三方楽所楽人といえども、自分の門人がこれ等の楽器を習得したいと希望した場合には、四辻家などに入門を取り次ぎ、その許可を得る必要があったのであるが、ここで注目しておきたいのは、「組合」とする表記である。『楽所日記』では、「社中」という語はすでに使用されていたが、門人のグループをして「組合」と呼称を使用した例はこれが初見である。「社中」あるいは「組合」という名称の存在は、江戸および、東儀文均が出張稽古に出かけていた美濃、尾張、三河などの地域では、文均の門人が、個々に活動するのではなく、こうした呼称をもった演奏団体組織を形成して、雅楽演奏にいそしんでいたということを示している。こうして、「雅楽ネットワーク」は、さらに細かく張り巡らされつつ、拡大する。

さて、同年六月二日の条には、四辻家から、「加藤許状被達右二付金五十疋被下候事、外二組合御入門御許容被達候事」とある。ここでは、文均が取り次いだ人々の四辻家への箏入門が許可されたことが記載され、かつ、「金五十疋」を四辻家から受理したという記事がある。つまり、それぞれの入門希望者が、入門にあたっての束脩金を四辻家に収めていたのであるが、その一部を、おそらく「仲介料」として、文均が受け取ったという意味であろう³⁰。また、六月十日には、「関東遠藤殿内古川、山田江書状並譜面差出」とあり、その譜面の奥書は、「右筆築當流之譜 奉傳江州三上公御曹子公也」としているのが若殿遠藤胤昌用の譜面であったことが示される。さらに、加藤氏へは、四辻家からの許状を送り、これを受けて四辻家に提出すべき誓約書の案文を同封している。また、元鳳、昌輪にあてて「四辻殿箏組合御許容之趣」を伝えている。名古屋の浄

信寺へも「箏入門之儀御許容之旨」を伝えるほか、江戸よりの帰路に名古屋に立ち寄った際に入門した間宮、渡邊、高木の各氏へ譜を送付している。このように、京都へ戻ってからは、出張先で依頼された楽譜を作成して送付する、あるいは、入門の取次ぎをするなど、地方への出張稽古の後がいつもそうであったように、かなり忙しくしていた様子が伺われる。

江戸より連れ帰った山田元三郎であるが、東儀文均の自宅に下宿しながら、筆築の稽古を受けていたようである。六月一日の条に、「山田氏稽古始」とあり、その後は稽古に関する記載はないが、文均が江戸を離れる前日の五月八日条には「山田氏月歩六七八九四ヶ月分金千疋落手ス、一ヶ月金貳分二朱ツ、」と記されているので、稽古は続けられていたものと思われる。さらに、九月一日条には、「昨夕遠藤殿御内山田小太郎より以手紙金子三両着」と記録され、このうちの二両二分は、山田元三郎の「月歩九月より四ヶ月分受取」とあり、追加の指導謝礼が送付されていることから、山田元三郎の稽古がまだ続くことが分かる。この年は、七月二十六日より四十八日間は、將軍逝去のために音楽停止となっており、九月十三日条に「今日より山田氏稽古相始」とあるのは、この間の稽古が中断していたものが再開されたことを意味するのである。その後、特に山田元三郎に関する記事が記載されないまま、『楽所日記』第十は終わる。

『楽所日記』第十一の翌嘉永七年の記事によれば、二月四日に「午後、宅二而山田氏合奏稽古、一越五曲」とあり、その後、しばらくは、複数の楽所楽人の協力を得て、合奏による稽古が続いている。文均は、同年二月二十二日の四天王寺聖霊会には、山田氏をつれて下坂している。その後も、「山田氏合奏稽古」とする記載が続き、三月十三日には「昼後、勢州入来、蘇合香一具、千秋楽、予、

山田合奏」とあるので、稽古も仕上げの段階に達していることがわかる。しかし、四月には京都の大火があり、東儀文均の自宅は火災の被害にはあわなかつたものの、何かと落ち着かない日々が続いたために、一時稽古も中断したようである。その後、五月二十七日条には、「予宅二而山田氏三十楽催之」とあり、五名の三方楽所楽人を招いて合奏している。同月二十九日には、「山田氏大曲稽古」とあり、やはり二名の楽人の協力を得ている。その後、文均は、妻の出産のため、一時期、親戚の東儀河内守宅に山田氏を預けたが、合奏による稽古は継続されたらしく、七月二十八日条には、「山田氏稽古謝儀之覚、廣就丈江金二百疋、景繁、久嘉、如雄、廣金、文靜江金百疋ツ、」と記され、協力を仰いだ楽人たちに謝礼を支払っている。

閏七月八日条には、関東遠藤家より「二両一分」の山田氏の小遣いを含んだ指導料が送られてくる。そして、稽古は九月中までと連絡された。以後、「山田氏合奏稽古」とする記事が続くが、結局は、八月末で稽古は打ち切りとなつたらしく、八月二十日条に「午後山田氏合奏稽古納会」と記される。翌二十一日には、遠藤家古川よりとして「山田氏、路金三両三分」が届いている。これを受けて、八月二十八日に、山田氏は帰国の途につく。東儀文均は、天王寺方楽人の林筑後守に依頼して、筑後守の門人愛宕山坊家来足助大藏という人物の関東下向に、山田氏を同道させてくれるように手配している。山田氏は、帰国の二日前の夕刻には、文均と共に、京都滞在中、何かと世話になつた東儀河内守文静宅を訪ね、三名で雅楽を合奏した後、両名を料理屋に招いて、芸子、舞子も同席させるといふ贅沢な接待をしている。前年六月より閏月をはさんで、十四ヶ月、一年以上にわたる在京期間であつた。

六 おわりに

この一年に以上にもわたる長い「雅楽留学」を終えた山田元三郎は、その後、どのように雅楽演奏に関わっていくのであろうか。『楽所日記』に記された範囲で、山田元三郎のその後を追ってみよう。

『楽所日記』第十一の嘉永七年が安政に改まろうとする十一月九日条には、遠藤家粥川輛矢という人物が、「大坂異国船二付関東主家用二而大坂表下坂」し、その帰路に京都に立ち寄つたとして、山田元三郎からの書状や贈り物を届けたことが記されている。第十二の安政二年一月十七日条には、古川、山田、菊岡へ文均が手紙を出したこと、二月九日条には、関東加藤氏より手紙と、「箏爪」の代金が届いたことが記され、四辻家に入門した加藤氏が箏の稽古を継続していたことが伺われる。同年七月二十九日条には、関東岡江州と山田氏へ文均が手紙を出したことが記される。その内容は、「松平佐渡守殿家中小川平左衛門見賢、横嶋廉蔵源正家両人許状、八十八曲譜面等」とあるので、江戸において、紅葉山楽人と山田氏による「雅楽ネットワーク」の拡大が行われていたことがわかる。しかし、同年十月六日の条に「寫田店表に江戸地震の連絡あり」と記されるように、十月二日には安政大地震が発生し、三上藩邸も地震による火災で類焼する。さらに、翌安政三年には、遠藤家若殿胤昌が家督を譲られることなく、四十八歳で亡くなる。

これらの影響があつたのか、『楽所日記』の安政三年の巻には、江戸に関する記載が一切ない。しかし、その翌年、安政四年には、四月六日条に、林石見守の関東年頭総代よりの帰京にともない、山田より品物が届けられたことが記され、この年五月八日の条には、東儀河内守が、関東下向のため出立したとある。この安政四年には、

林石見守がすでに年頭総代として下向しているの、この河内守の江戸下向は、おそらく嘉永六年の東儀文均に同じく、雅楽指導のための下向ではないかと思われる。このように推測できるのは、東儀河内守が、東儀文均と親密な関係にあったこと、また、山田元三郎の在京期間においても、河内守が、元三郎を一時的に自宅で預かり、また元三郎の雅楽指導にも、元三郎の在京期間を通じて継続的に関わっていたこと、さらに、この東儀河内守には、笛の家である山井伊予守が同道して、二人で江戸下向していることから、筆築および笛の指導のために下向したのではないかと思われるからである³⁰。

翌安政五年四月十日の条には、「関東紅葉山各方、古川、山田江菅並書面等」を江戸へ下向する人に事付けるとする記事がある。筆築の舌の作成に必要な葦を送ったのである。『楽所日記』第十七の安政七年（万延元年）三月二十六日条には、「関東山田元三郎より手紙、菅代金」とあるほか、八月四日条に、「関東古川将作上京入来」として、しばらく京都に滞在した古川氏と雅楽の合奏を数回行っている様子が記録される。そして、『楽所日記』第十八の五月二十日条に「関東山田へ菅金百疋分、手紙等差下ス事」とあるので、前年の記事とあわせて、山田元三郎が、筆築の演奏を続けていることがわかる。

注目したいのは、この年の八月十七日条の遠藤但馬守家餌取傳次郎が上京、山田元三郎よりの手紙をもたらすとある記事である。そこには、「雲州松平佐渡守殿藩中二人入門、束脩金二百疋達之事」とあり、山田元三郎が、雅楽を学ぶことを希望する武家と、三方楽所楽人との間の入門取次ぎ役を担っていたことが明らかになる。こうして、山田元三郎も、「雅楽ネットワーク」の重要な要として、江戸での活動を継続していたことが明らかになるのである。

このように、江戸時代も末期になると、雅楽演奏を楽しむ人々の

層が、かなりの拡がりをもっていたことが示されるが、その背景には、三方楽所楽人と楽所関係者以外のさまざまな人々が関わった「雅楽ネットワーク」の存在があったことが、『楽所日記』の記事には示されている。三方楽所楽人の側では、弟子をより多く取ることで、生活を安定させたいとする希望があり、財政的にゆとりのある人々の間では、趣味と教養としての雅楽演奏を学びたいという欲求があった。もちろん、必要性にせまられての寺社関係者の存在もあったであろうが、「教えたい」側と、「教えられたい」側のニーズをうまくかみ交わせながら、ネットワークの要として機能する、いわば「中間師匠」のような人々が各地に存在し、また、江戸においても活躍していたことが、東儀文均の『楽所日記』より、明らかになったのである。

注

¹ 三方楽所とは、天正年間に、応仁の乱により衰微した京都方楽人を補うものとして、新たに四天王寺より天王寺方楽人を登用することによって成立した禁裏付の雅楽演奏組織である。楽人の本拠地が、京都、奈良、大坂（天王寺）の三方に渡っていたため、三方楽所と称された。その成立時期については、すでに、「安土桃山時代の雅楽楽人について―三方楽所の成立をめぐる一考察―」（『四天王寺国際仏教短期大学部紀要』第三十号 平成二年）において論じている。ただし、天王寺方楽人は、四天王寺での法要など、大坂における楽儀へも参加する必要があったために、京都に在住する「在京」楽人と、大坂にとどまった「在天」楽人とに分かれて、京都と大坂方面での活動を行った。同様のことが、奈良を本拠地とする南都方楽人においても行われていた。

² 『楽所日記』は、全三十七巻よりなり、巻一より巻三十までが天保十五年から明治五年までの東儀文均の日記、巻三十一から巻三十七までは、文均が三方楽所の老分職を勤めていた期間の記録である。筆者は、この日記を史料として以下の論考をすでに発表している。

1 「江戸時代における雅楽の伝播―三方楽所楽人と雅楽愛好家との交流を例として―」（『四天王寺国際仏教短期大学部紀要』第三十四号（平成六年））

2 「江戸時代末期の雅楽曲のレパートリー―『明治撰定譜』に収録された曲目との関連についての一考察―」（『四天王寺国際仏教短期大学部紀要』第三十五号（平成七年））

3 「江戸時代の三方楽所楽人と三方及第一『楽所日記』に基づく一考察―」（『四天王寺国際仏教短期大学部紀要』第三十七号（平成九年））

³ 『楽所日記』より、この日記の記録された期間に、楽所楽人以外の間でも雅楽演奏が行われていたことを示す記事の例を挙げると、「下立売日暮西入近江屋市兵衛宅楽会」（弘化二年）、「川越留主居鎌田三郎大夫追善楽会」（弘化四年）、「福田氏六十年賀楽会木屋町三条上ル坂宅にて」（嘉永元年）、「素人社中楽会稽古」（嘉永元年）、「河州宅素人楽会付参」（嘉永

三年）、「鳩居堂楽会」（嘉永三年）、「高島式部宅楽会」（嘉永四年）、「大宮奥村氏楽会」（嘉永四年）、「高倉府内宅にて合奏」（嘉永四年）、「鳩居堂合奏始参」（嘉永五年）、「福田へ合奏会、社中出席」（嘉永五年）、「二条小田善二而藤村庸平催二而楽会」（嘉永六年）、「有馬催楽会参、奥村如一追善付」（嘉永七年）、「門人稽古始」（安政五年）、「有信堂へ森鳥楽会参」（安政六年）、「蛸薬師通大宮西へ入成圓寺楽会」（安政六年）、「下寺町長講堂楽会」（安政七年）などがあり、雅楽演奏を嗜んでいた人々が、個人的な雅楽演奏技能の習得のみにとどまらず、同好の者が集まったの合奏を行う楽会を開催していたことがわかる。そして、これらの人々を文均の側では、「素人」と称し、その集まりを「素人社中」としている。安政三年一月十五日条にも、「社中稽古始」とする記事あり、門人の集まりを「社中」と称していることが確認できる。

⁴ たとえば、東儀文均が雅楽を指導した人々の中に、「安土浄言（殿）院末寺楽」（弘化二年）とする記事があるほか、名古屋方面の弟子に関して、尾張熱田社楽役衆とする記事があり、この時代、寺社の多くに、雅楽演奏を担当する人々が存在し、彼らが三方楽所楽人の指導を受けていたことが分かる。これを裏付ける記事として、『楽所日記』第十三の安政三年二月五日の条に、四辻家よりの指示により、「諸社諸寺院奏楽出席恒例臨時且社頭二而社人奏楽寺院同断吟味之上」書面を作成した控えがある。それによると、三方楽所楽人の「文均、頼玄、廣胖」が指導を担当し、日常的な儀式での奏楽は弟子が行うとされる地方の寺社は、三河西尾城内の御劔八幡宮社と同西尾牛頭天王社とされ、「文均、廣篤、頼玄」が指導し、日常の奏楽は門人が行う京都の寺社は日蓮宗本法寺、その末寺の一乗寺、本住寺、本教寺、正法寺とされている。したがって、これらの寺社には、通常の法要や儀式に必要な雅楽の演奏を行う人々がいたということが明らかである。さらに、安政二年三月十六日の条には、「明十七日本法寺法要附楽僧無人二付彦管通太鼓四人頼付」とする記録があることから、通常の奏楽を行う人々の存在が明らかになる。これら寺社楽人を指導する側の三方楽所楽人は、「師家」と称されており、この日記の記録が示すように、通常奏楽を担当していた寺院関係者が不在の場合に

は、その代わりを勤めたようである。とはいっても、ここには、後の注8に示したように、東儀文均がしばしば指導に赴いた名古屋の寺院や熱田神宮、美濃の諸寺院などは記されていない。実は、同じ時に、南都方楽人辻則察が四辻家に提出した書面には、熱田社は辻家の指導下にあるとなっており、文均も指導にあたっていることが、明らかに出来なかつたのであろう。また、注3に挙げた個人愛好家や、ここに記載されない京都の寺社関係者の存在も『楽所日記』には記されているので、この時代、雅楽演奏を行う人々の存在はかなりの範囲にまで広がっていたものと思われる。

⁵ 『楽所日記』第十二の安政二年四月十六日条に、文均が弟子の寫田家に稽古に向いたところ、「今日より松蔭庄造妹お榮、林石州門人雅楽稽古之儀頼二付出席之事」とあり、すでに楽人林石見守の門人であった女性が、新たに文均の稽古を受けるといったことになったと記されている例がある。また、第十三の安政三年の巻には、十二月二十四日条に、「寫田夫婦」に「蘇合香相傳之事」とあり、謝儀として銀三枚を受け取った記録がある。この「蘇合香」の伝授というのは、稽古の最終段階において行われるもので、この夫婦がかなりの年数にわたって雅楽演奏を嗜んでいたことを示すものである。さらに、夫妻から、歳末祝儀として、金千疋が文均に差し出されている。なお、この寫田夫妻については、この年の大晦日に、「明巳年より三カ年之間儉約之所、楽道執心付難相止被存候二付、右三カ年間謝儀、予へ金三千疋、河州〔東儀文靜・南谷補〕、勢州へ金三兩ツツ被差出候二付両家此段申通相達候事」としたとする記事がある。この記事には、三年分の謝礼としての金額が提示されており、このことは、定期的に稽古を受ける門人が支払うべき謝礼の相場が、それなりに定まっていたということを示唆するものであろう。

⁶ 以下『楽所日記』の記事の引用などでも明らかのように、門人は入門に際し、束脩金として金百疋から三百疋、臨時の稽古の謝礼として金百疋から二百疋を相場とする謝礼を支払っている。楽人への入門は、三方楽所楽人の中でも、これを受け付けることが出来る楽人と、実際には、指導をしながらも取次ぎを行う権利しか持たない楽人とに分かれていた。

雅楽の演奏には、笙、篳篥、笛の三種の管楽器が必要となり、それぞれの楽器ごとに入門を受けることが出来る家および楽人が定まっていたようである。後述のように、箏、和琴といった絃楽器については、楽人ではなく、四辻家などの貴族が、その入門を受け付ける権利を持っていた。

⁷ すでに、西山松之助が『家元の研究』（西山松之助著作集 第一巻）（吉川弘文館 一九八二）において、雅楽の楽人以外の社会への拡大の様子（西山は、これを「一般社会人すなわち素人愛好者」と称している）や、雅楽においても、江戸時代中期以降には家元制度が構築されていたこと、および謝礼の金額やそのシステムについてなどを、さまざまな資料に基づき明らかにしている。しかし、同書においては、江戸における雅楽普及の動向については、言及されていない。もっとも、本稿においても、同書の第四章、第一節「雅楽の家元制度」を多くの点で参考にしている。

⁸ 『楽所日記』に残された東儀文均の地方への出張稽古の記録は文末の「表一三」の通りである。

⁹ 「楽所領知行」とは、寛文五年（一六六五）に、江戸幕府より三方楽所一統に下された大和国平群郡の八村にわたる朱印地のことである。知行は「二千石、但五ツ物成」とあるので、実質は千石であった。この知行は、三方楽所合わせて五十一人、京都方、奈良方、天王寺方のそれぞれに十七名と定められた楽人に支給される「家領米」として五一〇石、「師匠料米」が三方三名ずつに九十石、注11で述べる「三方及第」により上芸、中芸に及第した楽人の上位より決められた人数に支給される「上中芸料米」が二百石とされ、その他の楽人に、「稽古料米」二百石が、適宜、人数割して支給された。この外に、三方楽所楽人は、禁裏よりも、四十三名を定員とする「御扶持人」に対し、「御扶持料米」が支給されていた。しかし、これは微々たるものであり、さらに、安政五年には、知行地からの収入も「三ツ物成配当」となる状況であったので、以下に述べるように、いわゆる弟子を取ること、雅楽指導による謝礼という現金収入を得ることが、楽人にとっては、生活を支える上での重要な活動になっていく。

『楽所日記』巻十九の一月二十日条に、「四辻殿より関東年頭惣代名前差出可申旨被仰下候ニ付可差出様老分より達付今朝四辻殿へ持参」とあり、「関東年頭御禮 楽所惣代東儀近江守」として提出したとある。同年八月十八日条に、「四辻殿御招ニ付参上、関東年頭 勅使参向來閏八月十六日傳奏発足被仰出候旨」とあり、同二十一日には、多作州のもとを「年頭下向心得聞合」のために訪問し、「参要記」を拝借している。しかし、その後、関係者が京都を出立した様子はなく、再び九月十六日の条に、「関東年頭傳奏御発足來廿五日ト被仰出候旨御達之事」とあり、翌十七日条には、四辻家に江戸下向のための「御暇願書」の口上覚の控えが記載される。これによると、九月二十三日より十二月三日までの予定で関東年頭御礼として下向する事が記され、これが同十九日に認められた際には、「関東年頭御礼惣代并奏楽御用」という目的での東海道通行のための書類を申請している。しかし、結局、この年の総代下向は、同年九月二十一日付けで「差し止め」と云う通達があり、文均は江戸へ下向しないままとなった。なお、『楽所日記』第九の嘉永五年の記事によれば、同年二月十八日条に、「三方惣代関東参向去ル十四日、多作州発足」とあり、東儀文均が「参要記」を拝借した多作州がこの年の総代として下向し、閏二月をはさんで、同年三月八日条に、「年頭惣代多作州、去月廿七日帰宅之由承ル」と記載される。『統徳川実紀』によれば、この年二月二十九日に、公卿参着、閏二月一日に勅使対面とあり、ここに「伶人」も記載される。同月十四日には恒例の「管絃」が行われたので、多作州はこれを済ませて帰京したものであろう。

¹¹ 三方楽所楽人については、「三方及第」という試験制度があり、三年に一度開催されたこの実技試験の結果により、それぞれの楽人は「上芸」と「中芸」とに及第あるいは落第とふりわけられた。この試験制度の詳細については、注2の3を参照されたい。また、これを受験しない、あるいは、複数回の受験を経ても、上位の段階に及第しない場合には、楽人を統括する楽奉行の叱責を受け、楽家としての権利を剥奪されるなどの制度があり、三方楽所楽人の間では、一定水準以上の演奏技能が保持されていたことが明らかである。しかし、紅葉山楽人に関しては、このよう

な制度もなく、また、舞楽を演奏する場も、公式の場としてはなかったようである。こうした状況のもと、京都よりの楽所総代の下向の機会は、紅葉山楽人にとつても、雅楽指導を受ける貴重な機会であったと推測される。とはいうものの、紅葉山楽人の間で、舞楽の伝承がなされていなかったわけではなく、後で触れる天王寺楽人林家の廣基が残した宝暦十一年の記録には、同年四月二十二日に「田安右衛門督様ニ而御遊、舞楽有之候」として江戸紅葉山楽人が舞を舞った記事がある。しかし、これも「表立舞楽ト申儀御遠慮」とあり、非公開のものであったと記録されている。また、同年六月四日にも「松平讃岐守殿舞樂御所望、併御内々ニ而御催被成度旨」として、家老宅にて舞楽を披露した記事がある。その一方で、紅葉山楽人に舞を習う武家がいたことも記されており、舞楽の習得や演奏が禁じられていたわけではないことも分かる。この時に江戸滞在中の天王寺楽人たちも、複数名の武士の舞楽入門を受け付け、稽古を行っている。注24から注26も参照されたい。なお、『四天王寺楽人林家楽書類 第七十三冊 天王寺々僧與争論之留 第四冊』をはじめとする関係文書の筆者による翻刻が、『天王寺楽所史料』（清文堂史料叢書第七十一刊）（清文堂 一九九五）にある。

¹² 京都大学図書館が所蔵する四天王寺楽人林家楽書類に含まれる「禁裏東武並神社舞樂之記」（全十九冊）の寛永年間より万延二年までの記載事項の中で、三方楽所楽人の奏楽を目的とする日光および江戸下向が確認できる記事は、文末の「表一四」の通りである。

¹³ 『楽所日記』には、天保十五年五月九日の条に、「則是子（南都楽人辻則是・南谷補）、日光指南下向申付」とあり、同年六月七日条に「日光下向衆今日帰京之事」と記される。また翌弘化二年一月七日にも、「日光下向衆、昨六日帰京之由」とする記事がある。さらに、嘉永五年三月八日にも「日光指南去月十九日京都発足五家之衆下向之由承ル事」、同年七月二十六日に「日光指南下向之衆昨廿五日帰京」とする記事があるなど、『林家楽所類』に残される江戸、日光関係の記事が途絶えた後も、三方楽所楽人の日光楽人への指導が続いていたことが示されている。

¹⁴ 後述のように、なんらかの理由で楽人としての出仕を止められた三方楽

所の楽人が、その後、江戸で生活していた例も『楽所日記』には記されているが、こうした例も、京都、奈良、天王寺の楽人たちと、江戸楽人たちとの間で交流があったことを示すものである。

¹⁵ 『楽所日記』第十四の安政四年の記事を見ると、この年には、すでに年頭総代として林石見守が江戸に下向し、四月六日に帰宅したという記事がある。『続徳川実紀』によっても、二月二十九日に勅使対顔、三月九日に「管絃之御達」があり、同十四日に「管絃」が江戸城内にて行われているので、林石見守は、この管絃御聴聞を終えて帰宅したものであると推測される。したがって、この年に関しては、三方楽所として江戸に下向する所用は無かつたはずであるが、同年五月五日に、文均と同じく東儀家の楽人、東儀河内守（東儀文静・南谷補）が、「来八日より関東下向」とあり、閏五月をばさんで、同年七月六日条に、「昨昼、関東より河州無滞帰宅之由」とある。この東儀河内守の下向の目的などは一切記されていないが、本文中で後述のように、これも、嘉永六年の文均と同じく、雅楽指導のために江戸下向を行った可能性がある。

¹⁶ [表一三]の注記事項参照。

¹⁷ 嘉永六年に近い例をあげれば、嘉永二年三月五日に箕面山神変大菩薩御遠忌が、勅会の扱いで執り行われた。同年二月十六日の『楽所日記』の記事には、この法要の導師を勤めた長吏官の関係で、法要に出仕する楽人も、普段から御室仁和寺に入入りしている楽人が出仕するべく話を進めていたが、このことが明らかにすると三方楽所として引き受けるべきものであるという意見が出され、「三方楽所の上位者より参勤させてほしい」との願書が四辻家に提出されるという事態になったことが記されている。楽人と依頼主との間の個人的な関係による楽儀への出仕は、原則として認められておらず、公的な業務はあくまで三方楽所として引き受けるべきであるという認識は、江戸時代を通じて強く主張されていた。とはいっても、事実として、個人的な依頼による奏楽も多く行われていたことが、『楽所日記』の記述から明らかである。各地の寺社などへの出仕が公式のものとして行われる場合は、たとえば安政四年の興正寺の大会では、三方より十二名、つまり、京都、奈良、天王寺で四名ずつの

楽人を出し、かつ常日頃より同寺に関係している楽人がこれに加わるという形で出仕メンバーが決定されている例に示されるように、雅楽、舞楽の演奏は、まずは三方楽所として引き受け、三方から均等に出席すべき楽人を出した上で、日常的にその寺社に関係していた楽人がこれに加わるといふ形が、妥協案として通用していたものようである。しかし、こうなると、依頼した側にはかなりの金銭的負担がかかる。そのことが、結局は、個人的繋がりによる、「内々」の依頼が多く行われた理由であろう。

¹⁸ この「白川殿」とは、神祇伯白川家のことである。東儀文均とこの白川家との接点を示す記事は『楽所日記』には記載されず、古川との雅楽を通じた接点しか明らかではない。なお、文均は、「白河殿」と記載する場合もある。

¹⁹ 東儀文均も、もとは南都方楽人芝家の芝葛起の三男で、葛具と名乗っていた。その後、在京の天王寺方楽人東儀文暉の養子となり、さらに分家の東儀文信の跡を継ぐことになる。東儀文暉には、実子の文静がいるが、これが『楽所日記』に頻繁に記載される東儀河内守である。東儀近江守文均と、この河州こと東儀河内守文静は、一時期、文均の養家において兄弟の間柄にあったために、親しくしていたものであろう。

²⁰ 参考資料[表一二]の旅程表にもあるように、古川氏は名古屋での楽会に参加するほか、江戸までの道中の記録中の二月十八日には、見附の宿で「古川ト合奏」と文均が記しているので、この古川氏も雅楽の演奏を嗜んだことがわかる。また、文均江戸滞在中の記録においても、古川氏が楽会に参加している記録がある。なお、遠藤潤氏（國学院大学日本文化研究所助手）のご教示により、古川将作が、古川素平と同一人物であり、古川躬行として知られている人物であるという事を知った。この古川躬行は、白川家を拠点とした神祇復古を構想した人物であり、嘉永六年一月に白川家の家来となり、同年四月に白川家関東執役の前任者戸倉一学に代わり、関東執役に任ぜられた事もお教えいただいた。この場をお借りして、遠藤氏に御礼申し上げます。そうすると、東儀文均の江戸下向に同道した古川氏が、江戸での御用のために下向するとある『楽所

日記』の記事からしても、この「古川氏」は、古川将作であったと判断できる。そして、四月に白川家関東執役に着任した後、東儀文均の帰国に必要な書類を発行したのである。文均の江戸下向に際しても、この古川氏が関わっていたので、これと同様に白川家家来とする書類が発行されたのであろう。また、『楽所日記』によれば、この古川躬行こと古川将作は、文均が江戸を離れる日にも、品川まで見送りに来ている。ただし、この見送りメンバーの中に、古川要之助とされる人物も記載されている。さらに、文均帰京後の『楽所日記』嘉永六年五月十日条には、「遠藤殿内古川」という記事があり、『楽所日記』に記載される古川に関する人物特定は困難である。古川将作に関する記事は『楽所日記』第一七の安政七年八月にもある。

²¹ この江戸への往復の旅程については、文末の〔表一〕に参考資料としてまとめる。なお、東儀文均の江戸滞在中の記録を翻刻したものが、拙稿「江戸時代の武家と雅楽―江戸時代の雅楽を支えた一要素として―」『四天王寺国際仏教大学院短期大学部第三十六号』（平成八年）にある。詳しい事情は不明ながら、芝祐泰編による『雅楽通解』（国立音楽大学出版部一九六七）に掲載の楽家系譜には、この久恭について「辞官」とある。また、南都方楽人の芝葛房の日記によれば、久恭について「先年退去」とある。

²³ 久恭の次男時久は、紅葉山楽人として下向していた。なお、この時久とは別に、久恭の叔父も紅葉山に下向したが、この多成久は、江戸下向の後、辻姓を名乗る。さらに、その成久の弟は、京都方豊原家に養子に入り、豊原文秋として、遠藤但馬守に笙を指南している。久恭の息子時久は、この文秋より笙を学び、江戸に下った。注21の拙稿においても、この点について触れている。いずれにしても、久恭にすれば、縁者が在住していた江戸で生活することに不便がなかったであろう。そして、その縁戚関係から、遠藤家への出入りが認められるようになったと思われる。東儀文均の江戸滞在中の記録に、「辻」とあるのは、この多成久家のこと、文均が、江戸滞在中久恭宅に滞在すると記録し、江戸出立の日に、「辻宅」を出立と記録していることから、久恭もこの辻を称

した多家の関係者として江戸に滞在していた様子が伺われる。

²⁴ この「天王寺々僧與争論」とあるのは、宝暦八年（一七五八）三月を発端とする天王寺方楽人の宗門改帳の提出を巡るトラブルから、楽人の身分支配をめぐる係争に発展し、宝暦十二年三月に「内済」、つまり和解に達した争論のことである。この間、四天王寺においては、通常であれば雅楽、舞楽を伴う法要において、楽所側のストライキにより音楽の演奏が一切行われず、宝暦十年十月よりは、寺社奉行の元で裁定を受けるべく、天王寺方楽人を代表して、林廣基、東儀兼員、岡昌家、岡昌晴の四名が江戸へ下った。翌宝暦十一年六月の徳川家重死去に伴って、取り扱いが中断された後、和解に至るのであるが、この宝暦十年十月より宝暦十一年六月までの江戸滞在中の記録が、「天王寺々僧與争論之留」第四冊から第六冊である。ただし、これらの記録は、後の時代に書写したのもも含まれており、第六冊の冒頭に、「宝暦十年」とあるべき箇所を「宝暦十一年」と書写したが故の錯簡があり、正しい時系列でみると第六冊、第四冊、第五冊という順に記録が記載される。

²⁵ 一例を挙げれば、同年三月二十日には、「稲垣殿へ昌晴丈同道二而行、舞曲稽古始り稲垣殿、五常楽急、宅原源左衛門、延喜楽相傳ス、楽アリ、平調二而三臺急、林歌、老越二而賀殿急、颯踏、合歡塩殘楽、稲垣殿等、昌晴、鶏徳」とある。五常楽は現行では舞はないが、天王寺方では、江戸時代には、五常楽の舞を伝承していた。その舞と延喜楽の舞を相伝したとあり、以後、陵王、登天楽、林歌の舞を相伝とする記事が続く。

²⁶ この三名は、同年五月五日に入門し、同八日、十五日、十六日と稽古に通い、延喜楽一曲を済ませている。その後も稽古が継続されているが具体的な曲目などは挙げられていない。六月二十七日には、福嶋傳蔵が、「狛ノ太鼓、三ノ鼓、鉦鼓等ノ譜所望」とあり、廣基が認めて渡したこと、さらに、福嶋が古い笛を持参したので見たところ、二百年ほど前のものであったと記している。

²⁷ 平野健次は、「共同調査報告 田安德川家蔵楽書目録―その資料的意義―」『東洋音楽研究』第四一・四二合併号（一九七七年八月）において、「この田安家楽書全体は、宗武生前に収集されたものが、そのまま遺存して

いるのではない。宗武の楽書収集の遺志は、嗣子治察や、遺臣長埜清良らによって受け継がれ、むしろ田藩代々にわたって続けられた収集作業の結果が、こんにち遺存する田藩文庫なのである」としている。また、西山松之助は、『家元の研究』において、「武家社会における舞楽演奏の趣味化がどのように成立展開したかは、明らかになってはいない。おそらく田安宗武の頃からではないかと思われる。」(二二六頁)とし、さらに、これを松平定信が引き継ぎ、定信と親密な関係にあった林大学頭も熱心に雅楽を学んだことに言及している。

²⁸ 遠藤胤統は、豊原文秋の撰した『衆清録』(羽塚啓明編『日本楽道叢書』(下巻)に所収)によれば、笙を文秋に入門し学んでいる。しかし、京都に在住していた文秋より直接に指導を受けていたのではなく、おそらく文秋の指導を受けた後に、紅葉山楽人として江戸に下った多時久(久恭子息)の指導を受けていたのではないだろうか。

²⁹ 注27で触れたように、西山松之助は、林大学頭が雅楽を熱心に学んだことに触れ、そのことが彼の出身地である美濃岩村藩の雅楽熱高揚を招いた原因であると推察する(『家元の研究』二二七頁)。さらに、西山は、美濃高須の吉田茂三郎にも触れ、この人がもともとは大坂町人であったことを紹介している(同書、二四二頁)。となると、吉田家と天王寺方楽人の接点の一つが、吉田家の出身地の大坂にあったのではと推測される。

³⁰ 『明治の名古屋人』(名古屋市教育委員会 一九六九)によれば、淨信寺第九世住職秋楽は、幼児から音楽をたしなみ、文化十二年大神基孚、天保九年に安倍季良、弘化三年に豊原陽秋に入門しているほか、「東儀文均に多年師事し、神楽催馬楽朗詠などのうたいものから、詩歌管絃の秘曲の伝授を受けその演奏もすぐれたものとして諸国にその名声をとどろかせた。その門下数百人と称せられ尾張藩士に大道寺主水忠平、問宮六郎、生駒周行等、東照宮楽人に岡本鍵太郎、恒川弥太郎、佐藤弥平次等」(三八二頁)とある。なお、『樂所日記』に記載される名古屋安浄寺住職は、秋楽の次弟である。

³¹ 彦根藩第十二代藩主井伊直亮(一七九四—一八五〇)は、洋学を取り入れようとすると、一方で、雅楽についても生涯興味を持ち続け、家臣にも雅

楽を学ばせ、多くの楽器を収集した。そのコレクションは、彦根城博物館に収蔵されている。その中には、父直中の笙も含まれているので、直中も雅楽を嗜んだ可能性もある。

³² すでに、注2の1に挙げた「江戸時代における雅楽の伝播」および、「調査報告 島根県宍道町木幡家旧蔵の雅楽史料について」(『四天王寺国際仏教大学 短期大学部紀要』第三十一号 平成三年)において筆者が言及した「備前岡山城主松平内蔵頭楽役」岸本芳秀も備前から出雲地域にかけての雅楽愛好家のネットワーク構築に関わった一人である。そして、東儀文均と師弟関係にあった岸本が出雲地域の寺社関係者および富裕層に雅楽を広める一方で、後述のように、同じく文均と師弟関係にあった山田元三郎が、江戸においても、出雲藩中の武士に雅楽を広めていることで、図らずも、この出雲地域出身の雅楽学習者が東儀文均のもとで繋がってくる可能性があり、非常に興味深い。まさに、「雅楽ネットワーク」の構築過程を示す一例であるといえよう。

³³ 『樂所日記』第十八、文久元年五月三十日条には、文均の息子、文言と直温(南都芝家相続)とが、四辻家で「箏御入門、侍從殿御面会、御譜面御渡」と記載され、「御祝酒被下候事」とあるので、三方楽所楽人であっても、箏の習得のために四辻家入門しなければならなかったことが確認できる。しかし、「御肴料金百疋 兩人より献上ス」とあるので、その入門にかかる費用は、一般人の場合よりも割安であったことも示されている。こうした点については、西山松之助も、『家元の研究』二〇〇頁などで触れている。

³⁴ これもすでに、西山松之助が、『家元の研究』でも述べているように、この時期の雅楽愛好者は、一人で複数の楽器を学ぶ場合が多かった。したがって、三方楽所楽人の側でも、合奏の指導が可能のように、「社中」に対し、グループを形成して三管(笛、篳篥、笙)の指導にあたっていたようである。「表一三」の注記8に記した例にあるように、複数の名の楽人が下向している場合は、こうした「社中」への雅楽指導を目的とする下向である場合が多く、この東儀河内守の江戸下向も、遠藤家を始めた武家への指導のためであった可能性が高い。

〔表一〕 参考資料 東儀文均の江戸への往復の旅程一覧
往路（嘉永6年2月9日京都出発、同24日江戸着）

2月 9日	卯半刻、古川同道発足、美濃路廻、申半刻守山着、守山泊
10日	寅半刻発足、申半刻醒井着、泊
11日	寅半刻発足、関が原より文均、高須道へ、未刻高須吉田に着、夕飯の地合奏稽古、古川は垂井本道へ
12日	終日稽古
13日	一統より金百疋謝儀、辰半刻吉田発足、未半刻比尾州浄信寺へ着、古川本町駒庄二而滞留、文均も同宿する
14日	昼後、浄信寺へ参、父子稽古、夜楽会、古川も出席
15日	大道寺主人稽古、夕方管絃、古川も出席
16日	寅刻発足、申半刻三州藤川驛泊
17日	卯半刻藤川発足、申刻比新居関所通、薄暮遠州舞坂着、泊
18日	卯半刻舞坂発足、天龍川舟渡、見付驛申刻着、泊、古川ト合奏
19日	卯半刻見付発足、申刻金谷驛着、泊
20日	寅刻金谷驛発足、酉刻興津驛着、泊
21日	寅半刻発足、薄暮、三寫驛着、泊
22日	卯刻発足、箱根関所越、申半刻小田原着、泊
23日	寅刻発足、申半刻程ヶ谷驛着、泊
24日	寅刻発足、品川高縄にて昼食

復路（嘉永6年5月9日江戸出発、5月26日京都帰着）

5月9日	卯半刻辻宅発足、品川にて昼食、申刻金川驛着、泊
10日	卯半刻発足、申刻大磯驛着、泊
11日	卯刻発足、申上刻箱根峠関所通行、申半刻、箱根にて泊
12日	卯半刻発足、申刻吉原驛着、泊
13日	卯半刻発足、申刻丸子驛着、泊
14日	寅刻発足、大井川川越、申刻掛川驛着、泊
15日	卯刻発足、申刻新居船渡、関所通行、筑後屋着、泊
16日	卯刻発足、申刻藤川驛着、泊
17日	卯刻発足、申半刻尾州名古屋浄信寺着、山田隨身止宿
18日	高麗氏宅、終日合奏
19日	間宮外記殿筆篋入門、銀二枚
20日	浄信寺親子稽古、高木二男入門金二百疋、渡邊二男入門銀一枚、浄信寺、高麗、森本より金百疋ツゝ、安浄寺、覚正寺より銀三匁ツゝ
21日	辰刻浄信寺発足、濃州高須へ申刻、山田同道着、休息後合奏
22日	終日稽古、又入門一人金二百疋
23日	終日稽古
24日	各より金二百疋、辰半刻、山田同道発足、申半刻今次驛着泊
25日	卯半刻発足、米原船宿へ未刻着、休息、酉刻黒船乗船
26日	午刻、西江州事崎へ着、山中越申刻、山田氏同道帰宅

この往復の道中のすべてを徒歩で移動したのか、部分的に籠などを用いたのかは、『楽所日記』には船を利用した時以外に移動手段の記載がないので不明である。

〔表一三〕 『楽所日記』に残された東儀文均の地方への出張稽古の記録

冊数	年	月日	出張稽古先
第一冊	天保15	11月3日-10日	近江八幡井狩氏
第二冊	弘化2 1845	2月6日-14日	近江八幡井狩氏
		5月14日-7月11日	近江八幡井狩氏、安土浄厳院、美濃高須吉田家、三河西尾御剣八幡宮神主新家筑後守方、尾張熱田社楽役衆、名古屋大道寺楽役、同浄心寺(1)
		10月24日-12月2日	美濃高須吉田、名古屋(2)
第五冊	嘉永元 1848	5月25日-6月29日	美濃高須吉田家、同竹ヶ鼻、名古屋浄心寺、大道寺家、熱田宮、東照宮楽役(3)
第八冊	嘉永4 1851	5月8日-6月5日	近江八幡井狩氏、美濃高須吉田家、尾張津島堀田家、名古屋浄信寺、同大道寺家、安浄寺他、熱田楽役衆(4)
第九冊	嘉永5 1852	2月29日-閏2月-3月6日	美濃高須吉田家、名古屋浄信寺、同大道寺家他、三河西尾新家、招待者は西尾伏見屋新田成瑞寺とある、帰路、津島堀田家(5)
		8月3日-10月25日	美濃高須吉田家、津島堀田家、名古屋浄信寺、三河東浦本間氏、名古屋覚正寺、大道寺家他(6)
第十冊	嘉永6 1853	2月8日-5月26日	関東下向
第十三冊	安政3 1856	5月21日-6月29日	美濃竹ヶ鼻、同高須吉田家、名古屋浄信寺、東照宮楽役他、美濃了庵寺他、大垣桐山家(7)
第十五冊	安政5 1858	5月21日-6月25日	美濃竹ヶ鼻、同高須吉田家、名古屋浄信寺、安浄寺他への指導、熱田社での神楽奉納(8)

(1)：届け出せず。

(2)：同上

(3)：楽奉行四辻家への届け出は、三河西尾の御剣八幡宮神主新家筑後守を訪問するとしている。

(4)：同上

(5)：「内々下向」として、届け出せず。この間、文均出立後に、急遽通達があり閏2月23日に禁中御楽始が執り行われることが決まったと名古屋へ連絡が入るが、「臨期所労不参」として取り計らうよう天王寺方楽人に依頼し、京都へ戻ることはしなかった。しかし、3月3日、津島滞在中の文均のもとに、8日に御用会があるのでと、京都より書面を携えた迎えが来る。四辻家への露見を恐れたのか、即日津島を出立、美濃の吉田家に立ち寄り、急ぎ帰宅する。

(6)：(3)に同じ。

(7)：(3)に同じ。京都方楽人豊時郷とともに下向した。6月7日の記事に、「高須社中」、「大垣社中」とする記事あり。

(8)：尾州名古屋安浄寺へ下向と届け出る。蘭土佐守(廣篤)も同行。ただし、下向の目的には、裏辻家より依頼の熱田社での神楽奉納も含まれていたため、このように届け出たものであろう。裏辻侍従公愛朝臣は、この年4月18日も「異国一件御祈念仔細有之」として、交流のあった楽人戸とともに、雅楽の奉納を自宅にて行っている。

以後は、文均の三方楽所内での地位も上がり、また年齢的な問題もあったものか、地方への出張稽古は行っていない。しかし、地方在住の弟子たちとの間には、頻繁な文書のやり取りがあり、入門を受け付けるほか、所用で上京した弟子たちに、京都で稽古を行うという事は行っている。

なお、西山松之助も『家元の研究』〔西山松之助著作集 第一巻〕(吉川弘文館 1982年)第四章第一節において、京都方楽人豊原家および南都方楽人辻家の門人を分析し、その地域分布について論じている。そこでは、「その大部分が京都・江戸・伊勢・尾張・美濃に集中していることが、著しい現象であり」(224頁)とされており、同様の傾向が、天王寺方楽人の東儀文均の日記でも明らかである。

〔表一四〕 「禁裏東武並寺社舞楽之記」にある日光および江戸下向の記録

京都大学図書館が所蔵する『四天王寺楽人林家楽書類』に含まれる「禁裏東武並寺社舞楽之記」〔全19冊〕の寛永年間より万延2年までの記載事項の中で、三方楽人の奏楽を目的とする日光および江戸下向が確認できる記事は、下記の通りである。

冊数	年	月日	事項
第二冊	貞享3(1686)	閏3.13	二之丸舞楽御上覧
		閏3.25	舞楽御上覧
第四冊	宝永6(1709)	11.27	常憲院様御一周忌供養舞楽
		12.9	御一周忌法事舞楽
		12.10	舞楽
	宝永7	9月	清揚院様三十三回忌法事舞楽
第五冊	正徳元	11.3	白書院舞楽
	正徳2	5.7-8	厳有院殿三十三回忌御忌舞楽
	正徳3(1713)	9.26	増上寺御堂供養舞楽
10.13-14		文昭院様御一周忌舞楽	
第六冊	正徳4	10.13-14	文昭院様御三回忌舞楽
		11.9-10	東叡山常憲院殿御七回忌舞楽
	正徳5	4月	東照宮百回御忌御法事
	享保2(1717)	4月	増上寺有章院様御一回忌
		4.14	御堂供養
		4.28-29	舞楽
	享保3	4.29-30	有章院様三回御忌法事舞楽
		5.13	白書院舞楽御上覧
10.13-14		文昭院様緒七回忌御法事	
第十冊	延享2(1745)	3.13-	紅葉山法華八講権現様百三十回忌舞楽
		3.24	舞楽御上覧
第十一冊	明和2(1765)	4.17-	日光山東照権現様百五十回御神会
		5.9	御城管絃
		5.15	舞楽御上覧於白書院
第十五冊	文化12(1815)	4.18	日光山御神前御経供養
		4.19	日光山御神忌曼荼羅供養舞楽
		5.14	関東御本丸御上覧